

## ソ連抑留記

新潟県 中 沢 敬

### 一、出生から入隊

私は、西蒲原郡峰岡村（現巻町）大字峰岡で大正七年十一月一日、自小作農及び大工を生業とする中沢藤一の長男として生まれました。兄弟は五つ違いの弟が一人、家族はほかに祖父母、母の六人でした。

農業は一町歩ほどの耕作のうち七割は小作で、生活は決して楽ではありませんでした。

地元の峰岡尋常高等小学校を昭和八年三月卒業後、家業の農業を手伝いながら、青年学校へ入隊まで通いました。

### 二、兵役

私は昭和十四年三月、昭和十三年兵の現役兵として、満州（現中国東北地区）東部ソ連との国境の町綴芬河（ソ連名バグラニチヌイ）の第二国境守備砲兵隊第二

中隊に入隊しました。私は入隊後下士官候補者を志願し、約二年間現隊及び浜江省阿城の教育隊で教育を受け、十六年一月伍長に任官、同年五月志願して飛行隊に転科、同年七月操縦学生として熊谷陸軍飛行学校に入學、同校を十七年五月卒業、浜松の九七重爆機の訓練を受け、同年十月飛行第五十八戦隊へ転属、以後同隊において、満州綏化からマレー半島「ケチル」、スマトラの「メダン」においてインド洋哨戒に当たり、十八年七月から十月まで中支において中期航空作戦に従事、十九年一月太刀洗飛行学校に転属、以後助教として教育に従事、二十年三月より奉天防空のため奉天北飛行場で従事、同年八月五日編成、十五日編成完了の対ソ特攻隊羽攻撃飛行隊に転属、「湯崗子」へ。

### 三、ソ連侵攻から入ソまで

二十年八月九日、ソ連侵攻のため、特攻機受領のために十二時特攻基地「トンロップ」飛行場出発、汽車にて「ハルビン」近郊？香坊飛行場に到着、翌十日いまだ整備未了のため待機。その間、飛行場の反対側にあった細菌部隊の破壊作業が連日続けられていた。

八月十五日の終戦の詔勅は、夕刻うわさとして伝わってきて、夜、上官より終戦を達せられ、飛行機（九七重爆撃機一型）の整備のできたものから基地へ戻るように命ぜられ、単機十七日午後出発、奉天に薄暮着陸。奉天ホテルに宿泊、翌十八日午前十時ころ出発、基地へ帰還した。

後で聞いたところでは、満州国皇帝の乗った飛行機が日本へ向け離陸直前、ソ連戦闘機二機飛来のために離陸できなかつたとか。なお、奉天北飛行場の飛行隊はなお戦車群に対し攻撃作戦中で、攻撃から帰ってきた編隊の三機は、ソ連機の着陸しているのを見て飛行場の真ん中に自爆したとのことです。半月前まで一緒に準の訓練をしていたのに。

その後、飛行機は奉天に集結を命ぜられ、部隊は鞍山製鉄所のドイツより輸入したという回転炉の解体作業に従事。うわさでは、予定どおり作業が進まないと指揮者を銃殺するとおどしていたとのことでした。時々銃声が聞こえた。回転炉は四基あり、一基は建設中で、使用中の三基のうち二基を解体、付属の機械も

すべて解体して次々と貨車で運び出されていった。

解体作業のほぼ終わった十一月、記録では十一月、鞍山收容所出発、入所。

小学校の校庭に集合して、個人の荷物は先に送り、人員が後で行くこととなり、人数を数えて次々に駅へ出ていったのですが、私ども約二十人ほどが取り残され、そのまま小学校の一室で一夜を過ごすこととなりました。顔ぶれは准尉一人、私と曹長二人、あとは伍長三人ほどでした。その晩、現地の自警団の一人が来て自警団に残ってくれないかと誘われました。大部分は心を動かし、准尉ともう一人の曹長は特に心を動かされたようでしたが、私は「今になってドタバタすることは無い、先はわからないが成り行きに任せよう」と強く主張しましたところ、皆同意してくれて、翌朝そろって駅に向かいました。

自分の荷物は先に送ったため何もなくなつたが、幸いに同じくらいの数の荷物が校庭に残されていたので、各人思い思いのものを持ってきたのですが、内容は皆同じように主として防寒具でした。それにしても私の

荷物の中には最近の写真帳ともらったばかりの瑞七の勲章が入っていたので大変残念に思ったのですが、収容所に着いてから皆没収されてしまったのですから、あきらめるのが早いか遅いかでした。

最初一番困ったことは、カンボイの見えるところで用を足さなければならぬことでした。でも日がたつにつれてなれてきて、用を足しながら顔見知りと世間話をするようになりました。

汽車は、四平街から洮安、昂々溪を経て満州里へ、その間、私たちの汽車をほとんど物資を満載した列車が次々と追い越して行きました。中には机、いすなどもあり、随分と品物がないのだなと思いました。

貨車の中は、各車両ごとに材料をもらって二段にして真ん中の扉のところは三尺ほどあげ、下の真ん中に大小使用の穴をあけ、用がないときは板でふたをして、人が足を踏み外したり風が入らないようにした。広さは皆が手足を伸ばして寝るのがやっと、私はいつも各人がそれぞれ納まるように指示して、さて自分が寝る段になると手足を伸ばす場所がなくなり腰をおろした

まま寝ることが多く、そんなことがタシケントに着くまで続きましたが、もう一人の曹長はさっさと一番先に横になり寝てしまいました。その後何か損をしたことがいろいろありますが、これも特攻で死ねなかつた報いかなと思っています。

満州里で汽車がとまっているとき、私が立って何か指示していると突然耳もとでガンと物すごい音がして、一瞬何が起こったかわかりませんが、それはカンボイが、中が暑苦しいので貨車の側板に穴をあけておいたところ、ちょうど日が暮れたときだったのでそこから灯が外に漏れていたため、それに向かって一発発砲したためだったのですが、後で聞いた話では、逃亡兵と灯火信号をしているのではと思われたらしいとのことでした。

#### 四、タシケント収容所へ

満州里駅を通過してから警戒が緩くなったように覚えていきます。数日経てから私たちの車に食事の当番が回ってきました。それは米を炊くだけなのだが、まきを割り、米をとぐことから始めました。米はカマスに

入っていて、そのまま釜に入れ、すぐ水を入れてかき回し浮いたごみを取り、ふたがなくてカマスのあいたものを用い、沸騰して間もなく湯が引くとスコップでかきまぜ、しばらくして出来上がり。これを各車から取りに来るということで、主として飯だけだったようで、おかずはよく覚えていない。

私はまき割りを受け持ち、いつものつもりでやったのですが、しばらくやったことがなかったため、その晩は体じゅうが痛くて一晩眠れなかったことが、つらかった初めてのことでした。

タシケントまでは四十日ほどかかったように思いますが、その間体を洗ったのはノボシビルスクで一度だけ入浴、入浴といっても大きな浴室にとりどころに石の台がある蒸しぶろで、私には初めてのことでした。二年ほど後で収容所で浴槽をつくったのですが、ある者がつかりながら「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と言ったことでアクチーブがカンカンに怒ったとのことでしたが、蒸しぶろは私たちにはなじめないものでした。

列車はどんどん南下して、着いたところはどこか田舎の駅だったようで、定かではありません。各人主として防寒具の入った重い荷物を背負って随分歩いたのですが、だんだん歩きが鈍くなり、それからしょっちゅう「ダワイダワイ、ベストレ」のキャンボーイの声に追い立てられることになりました。四キロメートルか、あるいは六キロメートルくらいか定かではないが、二百名ほどで宿るところへ着きました。何かの倉庫だったようで、丘の上でした。

到着するとすぐ持ってきた荷は全部取り上げられ、寝ることになりました。鉄製の二段ベッドで、その晩は着のみ着のまま、疲れているのですがガタガタ震えて一晩寒さで眠れませんでした。翌日、まず宿舍の近くに穴を掘られました。何にするのかと思ったら便所でした。掘った四メートルくらい四角の深さ一メートル五十くらいだったか、これに丸太を数本渡して便所とし、間もなく屋根と囲いがつくられたのです。初めは大分抵抗を感じましたが、なれてしまうと用を足しながら世間話ができるという利点？もありました。

## 五、収容所の生活

収容所の作業は、ウオッカの貯蔵庫とかで、相当に広い丘の上で飛行場が見えるところでした。そこで毎日土方仕事。ノルマはまだありませんでしたので、割に気楽でした。晩には点呼がありました。私の指示で舎前に二列に並ばされ、収容所の将校（日本の中尉くらいに当たるか）が列の者を「アジーン・ドワ」と声を出して教えてきて、最後の数を二度書いて足し算をして、それに列外の前の方の将校一人、准尉二人（うち一人は収容所に来てから昇任）、それに列尾の私を加えて、前にいる人員を確かめ、それに炊事場に行っている炊事係三名ほどを加えてといったふうで、随分計算に弱いやつだなと思つたことでした。

食事は、何かの粉が入つたような汁を飯ごうに半分ほどと、一センチ半ほどの厚さの黒パン一切れ。黒パンは製粉歩合九十数パーセントとかで、時々麦粒が入っているほどのものでした。だんだん食事の量が少なくなり、加えて土方という仕事、それに夜の寒さでだんだん皆弱つてきました。

一カ月ほどたつてから？日本新聞というのが配られました。明らかに共産主義教育を目的としたものでした。全部の者が新聞を読んでいるのを見てソ連の将校は驚いていました。後日仕事場へ南海地震の記事の載つた新聞をだれだか持つてきて、彼らは数人の者のうちようやく一人くらいしか読めないようでした。皆教育の低さに驚いたものです。

その後二カ月ほどで他の収容所に移りましたが、食事は、そこも相変わらず粉のスープと前と同じくらいの厚さの黒パンで、しばらくして粉がコウリヤンになつてから皆栄養失調気味となりました。それは、コウリヤンを数時間かけて煮ても皮が破けず、食べても腹の中を素通りするため、髪も爪も伸びが悪く、皆おなかを素通りしてしまうためでした。

## 六、共産主義教育

二番目の第四収容所に入つてから、共産主義の教育が始まりました。ある日三人の者が指名され、特別教育を受けるためほかの一人所へ集められ、教育されました。三人とも身近な人だったのでショックでした。

期間はどれくらいかはつきり覚えていませんが、一カ月くらいだったようです。帰つてくると、定期的に民主化教育と称して、共産主義がいかによい主義であるか、書いてきたノートを見ながら習ってきたことを毎回聞かされました。だが特に何かを強制するようなことはありませんでした。また収容所の中の関係は旧軍隊と余り変わりませんでした。階級意識は極めて薄くなりました。

二番目から三番目の収容所に移ったが、二番目の収容所の仕事は、戦時中中断していた劇場の作業でした。三番目では、いろいろの工場、鉄道線路の敷設、建物の内装、土方仕事など、仕事は雑多でしたが、その行き帰りや休日などで反軍闘争、民主化運動と激しくなりました。アクチーブと称して、自選したような見習士官一名、軍曹と伍長各一名の指導者が、今までの中尉の所長にかわりソ側の意向ということで所内一切事を処理するようになり、中尉も一作業員として作業に出されました。この中尉はその後、歯が痛いので休ませてくれというのを、当日出入り口にいた見習士官が

仮病を使ってサボるのだと無理に作業に出したのですが、現場でますます悪くなり、その日のうちに死亡してしまいました。この中尉は召集で年をとっていたので気の毒なことでした。見習士官が殺したようなものだと言陰で非難したのですが、この見習士官が自ら任官して少尉の記章をつけていたのには、反軍闘争を唱えながら自らがと、皆陰で笑ったものです。

三月九日の晩、つるし上げがありました。ほかの部屋はわかりませんが、私たちの部屋（百名くらい）は、私一人が対象になりました。理由は、いろいろの民主化運動に非協力的という理由でした。発言するのは赤くなっている三人ほど、かわるがわる非難の理由を挙げ、中沢がいかに非共産主義的かと声高に私を責めて、二時間くらいも続いたか、あるいはもつと短かったか、随分長く感じました。次の日は、収容所全員が所内で演芸をやるときに舞台前に集められ、陸軍記念日に対する反省と反動分子の糾弾だった。所内で帰つたらこんな会社をつくるのだと下相談をしていたとのこと、それは労働者の敵だと大阪付近の人二人を、

これも二時間くらいだったか、数人の者がかわるがわる非難の言葉を浴びせました。

このつるし上げの反動？で、後日舞鶴に上陸した最初の晩、見習士官を逆つるし上げすることとなりました。反軍闘争をやりながらみずから少尉に任官したと称して少尉の階級章をつけ、出入り口の監督をしなから病氣の中尉を作業に出しついに死亡させたこと、みずからは収容所の最高責任者でありながら、最後まで残るべき者が一番最初の帰還者の中に入ったこと等の罪を挙げ、責めました。皆で殺しかねない雰囲気でしたが、鹿児島出身の軍曹が中に入ってその晩は事なきを得ました。今思い出しても嫌な思い出の一つです。この収容所のアクチープの一人（伍長）とは今も消息を確かめ合っておりませう。

#### 七、収容所の医療

私は、あるとき、れんがを積み、門柱の仕上げ作業を命ぜられ、机を二つ重ねて作業中、十一時半ころ、外の作業場への昼食の汁おけを積んだ車の軸に机の足を引っかけられて下に落ち、その際左足をついたため

足が地につけなくなり、四十歳くらいの女医でしたが、二日だけ休みをくれた。その後随分長い間足を引きずりながら土方作業をすることになり、帰還してからも気候の変わり目には痛くて農作業ができないときもありました。聞くところによると、当時一番つらかったのは痔を悪くした者で、熱がなければ病人ではないということでも無理に作業出勤をさせられた。それはソ側の、常にサボるのではないかとの疑いの考えが先に立つたようです。

#### 八、給与待遇

収容所が変わるごとに少しずつ待遇がよくなり、時にはブドウやウリのついた給食があるようになり、劇場の作業に特に優秀な仕事をしたというので一週間の休暇が与えられ、私の作業場の者数人は別棟で特別の食事を給されました。だんだんムチとアメの使い分けをするようになりましたが、それはどこかで帰還が始まって、待遇の悪さが共産主義宣伝の逆効果になってしまったのではとうわさが伝わってきました。

タシケントの気候は夜は冷えるが冬でも日中日当た

りは水が溶けるくらいでしたから、衣服は寒さをしのぐには事欠かないようになり、給与は作業を百%以上やった者にはわずかだが金銭が支給されるようになりましたが、百%を超えるか超えないかは現場監督の書き方次第だったようで、常に割合に損をしたのは土方仕事で、技術的な旋盤作業などでは数百%などということがあったとのことです。週に一日、日曜日は休業でしたが、半分くらいは交代で木材や石炭のおろし、作業場の後片づけなどで、二度ばかりウズベク共和国大統領の別荘だというところへ掃除に行ったことがあります。共産主義の国でも為政者は真つ白いパンを食べたり別荘生活をしているのだと驚きました。

#### 九、帰還

昭和二十三年六月末になって、数度に分け帰還することになったと話があり、その二、三日後、明日収容所を出発する人名が達せられ、幸いにも一番最初の組に入れられ、翌日駅に集合、列車の旅。来るときより短く、三十日ほどでナホトカに着いた。列車は来るときと同じように貨車の中を二段に使っていたが、人数

は三分の一ほどで楽だった。しかし、毎日のように民主化の話を連日時間を決めてやり、労働歌を歌い、デイスカッションをやったのには閉口した。このようなありさまがナホトカで乗船するまで続いた。

七月二十日、平棧橋に上陸、米兵から身体検査、頭からDDTをかけられるなどして、元海兵団の兵舎一階に泊まったが、翌日所長の講話によると、最初のころは二階への階段を一人で上れない者が多かったとのことでした。

そこで給料をもらったのだが、使いががなく、散髪などしてたら残り少なく、帰りに食事をするのがやっとなりで、家に着いたときは無一文でした。

家を継ぐ気がなかったのですが、弟がまだ結婚していなかったもので、やむなくいとこの長女とその秋に結婚、農業を継いで、大した波乱もなく現在に至りました。